

資 料

ピアノ演奏における熟達と幼児保育学科学生への音楽表現指導

竹村 正*

要約：筆者はこれまでRobert Alexander Schumann (1810～1856) のピアノ作品の理解と再現を研究課題の中心とし、演奏会という形で研究発表を行ってきた。さらに、そこから得られた成果を幼児保育学科学生の音楽表現指導に生かしてきた。本研究では学生に楽曲の理解、演奏技術や音楽表現法を教授する目的で研究者として独創性を活かし、教育実践力の向上に寄与する研究活動の在り方を検討する。

キーワード：ピアノ演奏、音楽表現指導

1. 序論

歴史に残る名曲と称される音楽芸術作品には、それを創造した作曲者の美的意識が込められている。しかし、その裏には生活をした環境としての国の風土、文化、人間関係、そして時代背景といった数えきれないほどの事象が絡み合い、多くの場合膨大な時間と労力を費やし誕生してきたものである。何にも増してその作品を生み出す音楽に対する情熱があることは言うまでもない。

筆者はこれまでRobert Alexander Schumann (1810 6/8～1856 7/29 ドイツロマン派を代表する作曲家) のピアノ作品¹⁾の理解と再現を研究課題の中心とし、演奏会という形で研究発表を行ってきた。さらにそこから得られた成果を幼児保育学科学生の音楽表現指導に生かしてきた。

演奏会とは研究し修練してきた作品を音という物理現象を媒体とした、いわゆる音響に変換し聴取者が享受するという構図のものであるが、当然ながら洗練され人々の心を打ち喜びをもたらす演奏は、一朝一夕に可能なものでない。その裏には長年にわたる修練の存在がある。

修練を重ね一般の者からは困難と思える課題を易々となし得ることを熟達と呼ぶ。ピアノ演奏者の多くは長年に渡って再現芸術におけるピアノ演奏の熟達を目指している。これは、自分にしかできない演奏で音楽表現をすることを意味している。その結果として、聴衆と音楽の喜びを共有し、人々の人生を豊かに彩ることに貢献できれば、それは素晴らしい芸術活動だと言える。

本研究では幼児保育学科学生に楽曲の理解、演奏技術や音楽表現法を教授する目的で、研究者として独創性を活かし、教育実践力の向上に寄与する研究活動の在り方を検討する。

研究活動とは、Robert Alexander Schumannのピアノ作品を中心に、他の作曲家の音楽作品の解釈と理解、再現のための修練、そして公の場での演奏という一連の流れを意味している。

2. Robert Alexander Schumannのピアノ作品を研究対象とする理由

これまで筆者はロマン派の作品以外にもバロック、古典派、印象派、近現代の作品の再現にも多

*高知学園短期大学 幼児保育学科 *Email: ttakemura@kochi-gc.ac.jp

く携わってきた。中でもロマン派の作品が直観的に理解しやすいと感じる。これまで演奏してきたロマン派の作曲家としては他にF. Chopin, J. Brahms, F. Liszt, F. Schubertらを挙げることができる。これら作曲家のどの作品も人々に喜びをもたらす点において、人類の遺産とも言うべき大いなる価値を有するものばかりである。

しかし人の一生という誠に短い時間を考え、あらゆる時代の膨大な名曲の数々を眺めると、研究対象の中心を決めざるを得ない。

Robert Alexander Schumannのピアノ作品は、ロマン派の作品の中でも再現において筆者の直感を最も生かせること、またバロック音楽を筆頭にそれまでの他の時代の芸術、文学とも密接に関わっている点において筆者にとって未知なる部分を多く秘め、また非常に魅力的な音楽作品群として研究意欲をかきたてる。同時に他の作曲家のできるだけ多くの作品の再現も試み、そこから得た知識や経験を研究の中心と定めた作品の再現に生かすことができれば理想的である。ピアノを演奏し、音楽を学生に教授する者として、研究対象の中心を決めることが何よりも必要といえる。

3. ピアノ演奏基礎技術の大切さ

筆者自身の器楽学科ピアノ専攻時代を振り返ると、ピアノ演奏に楽しさを幾分感じてはいたが、それよりも練習の辛さを多く感じていた。その当時、まったく気付かずにいたことなのであるが、演奏を型にはめ、多くの奏者が演奏するであろう形を模倣する、つまり物真似に終始していたと思われる。

そのように演奏することが、その楽曲の時代様式、音楽形式、作曲者の作曲意図などからはずれずにすむと思っていたと推測される。しかし、物真似は所詮自分の心とは大きくかけ離れた偽りの行為でしかなく、演奏することに満足や達成感、心からの充足感を味わう事はできない。いつも心のどこかで虚しさを感じ、多くの時間を練習に費やし、まるでレールの上を落ちないように自転車で走っているような緊張や不安を感じていたもの

である。またそれが当然のように考えた時代でもあったことに反省の念を感じる。

ピアノという楽器は他の弦楽器、管楽器、打楽器とは異なり発音自体とても易しい楽器である。誰でも鍵盤を叩けば望む音程の発音が可能であり、ハーモニーも鍵盤の位置さえ覚えれば響かせるのは容易である。他の楽器ではそうはいかない。音程を取るだけでも苦労するものである。しかし、ピアノ演奏で一番楽しいことは、オーケストラの響きであろうと弦楽器、はたまた打楽器の音であろうと、望みさえし、そして基礎技術が整っていれば、変幻自在であることだと思われる。またゆったりと歌うことや色彩の変化まで表現する能力を内在する。何よりピアノの音自体、まことに魅力的である。

つまり芸術的に優れたピアノ演奏には基礎技術の習得がまず欠かせないこととなる。その技術の習得には長時間にわたる集中と、気の遠くなるような回数の反復練習が必要である。これらのテクニカルな練習に明け暮れ、ピアノの持つ表現能力を開放できないまま疲れきってしまうことも珍しくはない。

基礎技術訓練として、敢えてもう一つ挙げるならば、それはソルフージュである。楽譜の音符を実際の音に結びつける訓練、読譜力ともいえるものである。

4. 良い演奏とは（イメージする・弾く・聴く）

良い演奏とはその曲を演奏するための技術が整っていること、そして曲の形式、様式、時代様式、作曲家の個性や特徴を理解していること、そして表現しようとする情熱に溢れていることである。練習時には様々なテンポ、音の強弱、何よりイメージに基づく試行錯誤を繰り返して行うことになる。指、腕、身体の使い方、そして自分の発する音を注意深く聴いていることがとても重要である。演奏が始まり終わるまで「イメージする」「演奏する」「聴く」、この3つの要素を常に繰り返しているわけである（図1）。

楽譜に書かれていることすべてが作曲者の思い

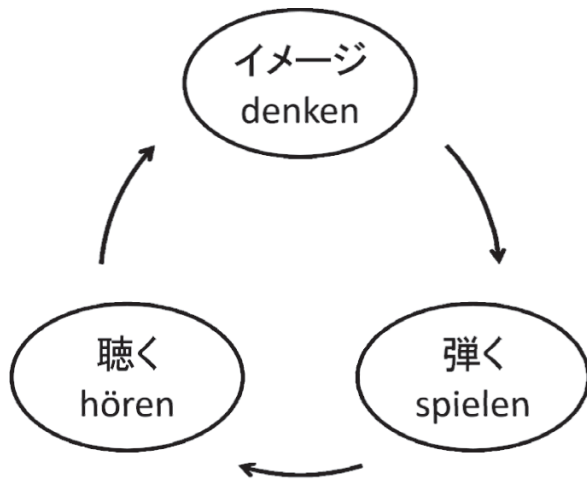


図1. 演奏の3要素

や曲の表現意図を読み解くヒントの山だと考えられる。なかには譜面には書き込めていないものもある。作曲者の主な生活国、地域の文化、時代を含む独自の美意識、信念、信仰など、それらについて他の芸術の鑑賞、また文献から知識を得ることは決して無意味なことではない。いずれにせよ自由な表現を目指すためには楽曲についての多面的考察が不可欠である。

一つの楽曲には一つのイメージが貫かれている。もちろん文章でいうところの句読点のように精神的、肉体的緊張と弛緩を繰り返してのことである。そのイメージを持続して演奏することは大変な集中力を強いられることとなる。しかし、統一されたイメージがないと自然と流れる心の動きや、色彩の変化などといった心の自由な動きは生まれない。また、聴く者にとっての音楽の豊かさ楽しさも生まれてはこない。

聴くということについてももう少し検討してみる。練習はもとより研究発表の演奏会舞台上でも自身の発する音を、そして音をよく聴いているということはとても大切である。

1音からフレーズ全体へ、その姿がきれいな形をしているのかを常に見極めなければならない。そのために指使いや特にペダリングには気を配ることが必要となる。ペダルには3つの種類がある。すなわちダンパーペダル・ソステヌートペダル・ラウドペダルのことであるが、ペダリングの技術

は倍音を得るという目的の一つだけとって打鍵の前に、後に、発音と同時に、あるいはピッチカートペダルなど要求される音のイメージを具現化するためにはどうしても必要な技術である。

また、いずれにしてもよく音に耳を傾けるためには、ペダルも含み良く調整されたピアノが必要不可欠である。

5. ピアノ演奏で最も大切な技術一指について

「ピアニストは指先で音を感じて聴いている」と言われることもあるほどに指の使い方の基本は良い演奏に絶対欠かせないものである。指先の緊張は柔軟な手首、上腕、のもとになる。また音を聴くという行為そのものを意味しているといえる。鍵板に指先、手を置くとも言ったりするが、それは実に安心感、幸福感に満ちている状態なのである。

次にピアノ奏法であるが、大きく分けて基本的に「指奏法」「重力奏法」の二つがあると思われる。

指奏法とは指の第一関節を中心とした落下運動を主とした奏法で、バロック、古典派のピアノ曲に使うことができる奏法であり、その特徴として、すっきり、またはくっきりとした発音が可能であるが、深い響きは得にくいものである。

かたや重力奏法は指の動きだけではなく腕、上半身の重みを指に伝え、その重さの移動による奏法で、これはロマン派以降の楽曲を弾くときに必要になってくる技術である。柔らかく深い響きを得られる奏法で、ロマン派以降の楽曲を弾くときに必要になってくる²⁾。

この重力奏法では重さに耐えられる指の強さが不可欠で、しかも各指が力が入った指に関係なく自由に動けることが必要になってくる。いわゆる「指の独立」である。

いずれにせよこの指の緊張が、柔らかく柔軟な手首を、そして自由に動ける腕、上半身を生み出しているといえる。丁寧な指練習としては上記の「指奏法」そして次に「重力奏法」という手順を踏むことになると考えられる。

6. 研究活動の成果を生かした幼児保育学科学生の音楽表現指導

1) 学生の音楽表現意図を見抜く

学生達の様々な個性をもとに発する音楽表現は、例えば様々なテンポで弾いたり歌ったり、音量もそれぞれに異なり同一の楽曲でも一つとして同じものはない。

楽曲へのアプローチに大きな間違いがない限り、学生の持つ楽曲のイメージを表現するために今どのような助言や指導が必要か、そして学生の学習意欲をより引き出せるよう瞬時に判断し、助言できるように心がけている。

模範演奏を行う場合は理想形にはこだわらず、学生が正しいイメージを抱いていると感じるならば、そのイメージでの表現目標を模範演奏にすることを常としている。

それは学生にとっては演奏意欲をかきたてるものであり、学生と出来た喜びを共感する結果を生む。それは次なる学習意欲にも繋がっていく。

楽曲について間違った解釈が学生にある場合には、当然その演奏には困難が伴ってくる。その訂正には多くの時間を要することになる。

楽曲の正しい解釈は勿論のこと、瞬時に学生の表現意図を聴き取る能力は、研究活動の積み重ねで習得した的確な指導のために欠かせない能力の一つだといえる。

2) 初見能力の有用性

初見能力とは、例えば初めて見る楽譜を即座に頭の中で音に、そして実際の音としてすばやく歌唱や楽器による音楽に変換する力のことをいう。それは音楽理論の知識はもとより、読譜の訓練によって養われる能力であるが、学生にとっては至難の業である。暗譜することを敬遠しがちになるのが欠点ではあるが、学生の音楽表現指導には必ず必要な能力である。もちろん学生にも必要となる能力である。

実際の教育現場ではゆっくり練習している時間がなかなか取れないのが現状であり、初見能力は大変便利な能力である。多くの学生の様々な音楽

表現の指導を短時間にこなすことができるのも、この能力に負うところが多いと思われる。

長年の研究活動の成果ではあるが、学生にも習得してもらいたい能力と考える。

3) ピアノを含む楽器、歌の演奏指導について

子どもの歌の伴奏はピアノで行われることが多い。はっきりとした発音と安定したテンポ、ブレスの仕方など発声に関すること、ピアノを含む多くの管打楽器、例えばリコーダー、大小太鼓、マリンバ、アコーディオン、ドラムの基本的奏法を指導していくわけである。中でもピアノを弾くことは全ての楽器奏法の基盤ともいえる。

入学時に全くピアノに触れたこともない学生から、幼少時より何かしら音楽に触れ、ピアノを弾いた経験のある学生とではその演奏能力に大きな差があるのは当然である。どちらもその学びに苦労があろうと、持てる無限の力を発揮し、結果的に音楽表現が楽しく特別な時間だと感じられるよう指導することが必要不可欠だと考えている。

そのための基本知識として「音符と休符」「楽譜の読み方」「拍子」「調性の知識」「音楽標語と用語の理解」をはじめ、「体の姿勢」「指先の緊張を初めとする腕、手首の柔軟さ」また「正しいペダルの使い方」などの基本的演奏技術の常なる修練の必要性は、筆者の研究活動からも明らかである。学生自身が音を発することが楽しい、あるいは音楽が美しいと感じられるかどうかはとても大切なことである。

歌唱については、歌曲の音楽的理解をもとに発声の練習は欠かせないが、他に技術として「響きのよい発声法」「明瞭な言葉の発音の仕方」、子どもについての知識として、子どもの年齢別成長による「発声の特徴や音域の変化」、肺活量からくる「発声持続時間」などの知識が必要である。いかに歌唱を楽しみ遊びとして、その生き生きとした時間を子どもたちと共有できるかにかかっている。

7. 幼児保育学科学生への音楽表現指導の視点

1) 学生の現状

入学時に全くピアノに触れたこともない学生から、幼少時より何かしら音楽に触れてきた経験のある学生とではその演奏能力に大きな差があるのは当然であるが、どちらも、持てる無限の力を発揮し、結果的に音楽表現が楽しく特別な時間だと感じられるよう指導することが必要不可欠だと考えている。

2) 読譜力向上の必要性

読譜能力獲得と向上は楽曲の解析を行う上で欠かせない能力である。教育現場での実践的能力でいうと楽譜を瞬時に音に変換する能力である。

音楽経験の少ない昨今の学生には極めて難易度の高い要求であると思われる。例えば、新曲を瞬時に演奏する力は勿論のこと、声域の狭い子どもの歌に合わせ移調したりする場合、音楽理論の知識が必要となってくる。一瞬間が成長と発達という子どもの日常において移調演奏が瞬時に行えることは理想的といえる。

3) 学生指導の要点

学生が何を表現しようとしているのかを理解し、それを実現するために必要なことを抽出し、彼らに伝え指導すべきことの中で今一番必要なことは何か、そしてどう伝えるかというのは、楽曲の理解は勿論のこと学生の学びの軌跡を知った上でないと的確な判断はできない。

授業や他の活動で共に行動している時間が長いほど指導の要点を直感的に判断できるものであるが、信頼関係がないとどうにもならないと考える。

4) 効率的な学習方法

基礎演奏技術の習得は表現のイメージの創造無くしてあり得ないといえる。

演奏する音楽のイメージをしっかりと創造し、その為にどのような技術を要するのかを考え、楽曲の一部分ごとに修練を重ねることが効率の良い学習方法である。

また、指の訓練も含めると日々多くの時間を要することは必至である。

5) 自信につながる学び

演奏技術を含み音楽的に、また人間的に成長を伴う指導方法は、おしなべて一様でないことは明らかであるが、やはり心から音楽と向き合う姿勢で今その学生に必要なこと、その学びをどう支援、援助するかを常に新鮮な視点で考え実行することが重要である。

音楽表現について学び、技術を身につけ、子どもたちにより良い学びの環境を提供できる力を持つことは、子どもの将来に大きく影響することはもちろんのこと、将来の保育者としての自信につながるものである。

その為に、学生時代にいかに良いものを多面的に、そして自主的に学ぶかを筆者自身の身をもって伝える必要があると考える。

8. 器楽合奏コンサートへの取り組み

2017/12/28 高知学園短期大学 7 号館

音楽表現指導の一例として、学生が取り組んだ器楽合奏コンサートについて記述しておく。準備期間は2か月足らず、「音楽Ⅰ（器楽）」の授業の一環として子どもの心身の豊かな成長と発達の支援と援助という視点から音楽の楽しさ、豊かさ、美しさを子どもたちに伝える目的で、10名程度のグループに分かれ、選曲からプログラミングまで自分たちで考え、器楽合奏コンサートに取り組んだ。

全学生が同時練習するには充分と言えない練習環境であったが、協力し合い全力で演奏することができた。

子どもたちに披露する目的でそれぞれのステージに工夫をこらし、真剣に演奏に向かう学生達の姿に、そしてその音楽は感動をおぼえるものであった。

各グループの練習に指導者として参加し楽曲の理解、各楽器の演奏に関わる指導や助言、音のバランスなど指導にあたれたことは辛いことはあっ

たものの、むしろ充実した幸せな時間であったと思われる。

演奏を終えた彼らの紅潮した顔や笑顔こそ、全てが良い結果をもたらしたことを物語るものだと感じられた。学生達の持つ秘めた力の無限さには驚きを隠せない。彼らは集中し心から真剣になれる時間を望んでいる。また音楽のもつ力の無限であることを知らしめた結果となったことは私にとって心から嬉しいと感じられることである。

このように音楽を媒体として学生の指導が続けられるのも継続的な自分の研究活動があつてのことと考えている。常に新しい疑問や演奏上の困難な問題に直面し、解決しようと努力する、そうして音楽の喜びを知り続けていることが、指導者としての原動力になっていることは明らかである。

9. 今後の研究内容

音楽表現に関するより良い指導の実現のためには、自己の感性を常に磨き、基礎演奏技術の上に新たな表現のための技術を模索、習得し続けることが肝要である。

ピアノ作品は勿論のこと、優れた芸術作品に触れ、その再現に学生と共に挑戦すること、特に日本歌曲の伴奏法や子どもの歌、わらべうたなどの伴奏編曲にも取り組み、研究成果の活用を考えている。

日本の風土に生まれ、歌い継がれてきたこれらの歌は枚挙にいとまがない。地方によっては同じ歌でも歌い方や歌詞が微妙に異なっていたりする。明治、大正期以来、西洋音楽との融合が行われてきた日本の音楽は文化として受け継がなければならないし、現に我々の心の奥深く染み込み、ふとした折に心の故郷のような郷愁を感じている。子どもたちにも受け継いで欲しいという願いを込めて、学生に伝えなければならないと考えている。

子どもたちが美しいものを素直に美しいと感じ、綺麗だといえる心を持ち、感じたことを素直に表現できる力を育み、思いやりの心を持てるよう、将来の保育者たる学生と音楽をすることの楽しさ、嬉しさ、豊かさを共有する存在でなくてはならないと考える。

参考文献

- 1) 千蔵八郎, 名曲事典, **1971**, 東京, 音楽之友社, 475-531
- 2) 井上直之, ピアノ奏法: 音楽を表現する喜び, **1998**, 東京, 春秋社, 62-66

受付日: 平成30年 1 月25日

受理日: 平成30年 2 月 9 日

Data

Achievement in Piano Performance and Musical Guidance to the Students in the Department of Early Childhood Education and Care

Tadashi TAKEMURA

Abstract: The author has been interested in understanding and representing the piano works of Robert Alexander Schumann (1810～1856) and has been performing his music at concerts. Results obtained from the experiences have been applied to musical guidance to the students in the department of early childhood education and care.

In this study, the author considered an ideal research contributing to enhance practical education by utilizing originality as a researcher for the purpose of promoting the students' understanding of music, and teaching musical performance or musical expression.

Key words: piano performance, musical guidance

*Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education Care, Email: ttakemura@kochi-gc.ac.jp

